
ウルトラマリン！

有馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマリン！

【Zコード】

Z2286D

【作者名】

有馬

【あらすじ】

廃部寸前の白根県立柳都高校水泳部。大会団体参加人数を割る事態に急遽助つ人として招集される主人公、汐見トキ。「競泳なんて幼い頃手ほどきを受けたくらいで無茶だよ」……ところがどっこい。結構泳げるじやん。「よし決定、お前今日から部員」「!?」。男女混合であるゆる楽しく練習、発展しそうで全然しない部内恋愛、大会に向けてしっかりと真剣に行きつもやつぱりほのぼのコメディなお話。

Scene・0 フライ・イン

フライ・イン。

競泳を始めてしばらく経つけど、相変わらず飛び込む瞬間だけは
ちょっと怖い。

思った以上に高い所から水面へと、頭から飛び込まなければなら
ないから。

スタート台は足元からすれば、ほんの少しの段差。でも私の視線
はそこからさらに155センチも上有る。
台の上に立つたとき、その高さには田がくらむ。自然と氣後れす
る。

何度も体感しているのに、私の身体はなかなか慣れてくれない。
それでも、スタートのホイッスルが鳴つたら否応なしに私は台を
蹴り、眼は2メートル下の水面へとダイブする。

浮遊。

恐怖。

少し後悔。

無重力。

ちょっとの間だけの、果てのない時間。

しかしあがては 身体は弧を描いて水の壁に突き刺される。

瞬間。

衝撃。

イメージが破裂し、視界はどこまでも白くなる。

全身が水に染まる頃、私の中から余分な何もかもが消し去られる。
もう何も迷わない。何も思わない。考えない。

それは私であつて、私ではない。私は
たぶん私はもう、どこにもいない。
ゴールするまで、私はお預けなのだ。

きっとそれは意志そのもの。

どこまでも透明で、無垢で、無邪氣で、健気に水の先を田指す。
フライ・インの衝撃は私の殻を破り、意志を産み落とす。
終わるまで水中を駆け抜ける意志。
終わらないならば、きっと海だって越えていけるぼどの意志。
それが大好きだった。

私はそれに会いに、今日も台の上に立つ。

Scene・0 フライ・イン（後書き）

読んでいただき本当にありがとうございます。色々とベタベタなラ
イトノベルになるよう頑張ります。宜しくお願いします。

Scene・1 大型連休の翌日の話（前）

白根県立柳都高校には学食がない。

その事実は何もこの私、汐見トキが今更ため息をつくまでもなく、柳都高校に通う者なら誰でも憂えることだった。近くにコンビニが無いわけではないけど、短い昼休みの中で買いに出るのは困難の極み。結局殆どの学生は早朝に眠い目をこすりつつ、遅刻寸前でコンビニ弁当を買うしかないのだ。親にありがたく弁当を作つてもらえるのは少数派で、しかも飢えたゾンビと化したクラスメートの餌食になりやすい。もしこれから柳都高校に入学する後輩がいたら、まず「親御さんの弁当は隠れて食べる」と教えなければならない。本当にバイオハザードだからね。

とはいっても、昼休みの食料調達方法は一応他にある。例えば今私がいるのはパンと飲み物しか売つていない購買部だ。ここはどこの高校にもある通り、典型的な戦場になつてている。御飯や麺類が食べたい人にはオススメ出来ないし、なかなか人気商品は手に入らないけど腹は膨れる。

こんな感じで、とりあえず柳都高校の昼休みはコンビニ・弁当・パンに大別されることになる。たまに例外としてカツ丼を持ち込んでどこからかお湯をかづぱらつたり、朝マックをテイクアウトして冷めてるはずのそれをどこかで温め直して食べる馬鹿もいる。まして市を中心街にダッシュで美味しいもの喰いに外食に行くなんてのは猛者中の猛者だ。

勇者といつても過言じゃない。

ま、これは伝え聞いた話だから、多分数年前の伝説なだけだとは思う。

そんなことを考えながら購買部の人波に揉まれている。
昼休みが半分過ぎようとしていた。

もうすぐタイムサービスが始まる。

喰い足りなくてオカワリを求めたり、金欠気味の学生がケモノと化す時間。

それを見計らつて、混雑の中に飢えたハイエナが群がり始める。私もその中に紛れ込み、肉食獣の如く人混みの向こうの獲物（＝パン）に目を凝らした。

今日は日直の関係で、この時間に来ざるを得なかつた。

理論上はタイムサービス前に多少の高い金を出せば売れ残りの中でも良い物を買える訳だけど、タイムサービスという新たな戦場の中で勝ち取ることに快樂を見いだしているケモノにとつてそれはフライングに等しい行為。以前サービス開始前にめぼしい獲物を根こそぎ買つていった男子生徒がフクロ叩きにされているのを見て、私はルールを遵守することに決めた。

集団心理の類か何かまではわからないが、ここには確かなルールが存在する。フライングはもちろん、カルテルもトラストもコンツエルンも禁止。学年も性別も関係なし。実力主義の中にフェアプレーの精神がある。……ここに居るときは、たぶん私は女子じゃない。学ランを窮屈そうに着こなす筋骨隆々の運動部連中には叶わないけど、それ以外になら勝てる自身があつた。男友達に泣きついて買って貰つていた1年生前期の頃とは違うのだ。

見た限りでは、今日は中々良い物が残つていそうだつた。割と穴なクリーミパンが目測で5、6個、ジャムパン系も多い。1個とはいえ焼きそばパンがあるなんて奇跡だ。流石にこれは先に誰かに買われそうではある。買う物の優先順位をつけ、釣り銭がないように小銭を握りしめる。

とにかくこんなに売れ残つてゐなんて、今日は實にツイでいる。さらに良いことに、前をふさぐ運動部と思しき男子は少ない。いる。これは絶対いける！

飢えた各々が昼休みの半分、12時45分をカウントダウンする。

携帯でわざわざ時報を聞いてる人もいる。そこまでするかと入学したての頃は思つたけど、柳都高校に通つてはいる学生からしたらいつものことだった。

時計の針を気にして、混雑しているに関わらず購買部前が沈黙に包まれる。

嵐の前の静けさだった。

時刻は12時44分40秒……50秒……

5……4……3……2……1……

「おーーっすトキ、探したでー」

空気を完全に無視した関西弁が背後から聞こえ、がつちりと首根っこを捕まれた。

「みやツ！？」

0……

「それじゃ今からタイムサービス始めますよー全品半額」「

購買のおばちゃんの声を聞き終わらないうちにケモノといつケモノが吼えて獲物に飛びかかった！！

しまった！ 今ので完全に出遅れたッ！！

1ナノセカントも待てず駆け出したいのに首根っこが動かない！ああ！ 待つて！

「クリーム！ ジャム！ 焼きそば！ ちよつと… 離して…！」

「いやいや落ち着きい、トキ」

そう言つて私の邪魔をする張本人は私の前にマックの紙袋を突きつけた。

「これやるから」

「……へ？」

購買のパンに対する恐ろしい程の欲望は、それを遙かに上回る「駆走」の前に一瞬にして霧散した。

価値基準

「ううん、この？」

あまりの唐突な展開に、頭がうまくついていかない。

ええでええで そのためにはできただんやし」

「アツの朝マックを頬張つたりかつて購買前の生存競争に勝てなかつた私のためにパンを買ってきてくれたりした「馬鹿」、小針新がそこにいた。もう一つ同じマックの紙袋を眼前に持ち上げる。

「昼食まだなんやろ? 一緒にどうや?」

「Jの時、不覚なことに私はまだこの男の策略に気付いていなかつた……」

Scene・2 大型連休の翌日の話（中）

「晡食まだなんやわ?
一緒にいどや?」

私の目は新のマックの袋から離そうとしても離せなかつた。普段の学校食生活では決してお目にかかれないゼイタク中のゼイタク。中からは仄かに油っぽい香りが漂つてきている。

エスコートしつつ殺人的な人混みから遠ざけていった。むむ、なかなかやるな。

「アーティスト」

「その前に聞いておくが、メーネーは」完全に釣られた姿勢ながら一応尋ねる。

ハニカム

「ピックマックはファイレオファイッシュにでりやきキンにタフルチーズバー ガー、フライドポテトは勿論しサイズを2つ、マックシェイクの二ラとストロベリー。デザートにマックフルーリーのキットカットとオレオクッキー。この中から好きなのを選んでな。ちなみにさつき買つてきたから出来たてやで」

かつてゐる。

「あ、かたくこ駄走はなし! もう! よつしゃ、ほならビコで喰うか……」

『……』

言いかけたところで、地獄の底から天を衝く怒声が響き渡つた。しかもエコーがかかっている。廊下の向こうからフルアクセルで突進するタイガー戦車のような教師が1台……じゃなかつた、1人。

『貴様あー限前のホームルームでピンピンした面を見せておいて、
2限の我的授業中にビニード油を売つておつたあああああああああ
ああ』

新の顔が一瞬にして青ざめる。

「うわ、あかん！ 銀山やないか！」

今日も逃がさん！

『小金今田といふ名は逃がさん！　お前の数々の巧妙な代返は
よつて隠滅されたサボリ遅刻早退欠席その他諸々、この銀山妙高が
全て暴いて天日干しに』

「ほな、ワイはこれで上

付け
口一を屬さ給れる前に親に重い力

「冷めないうちに食べとき！」
ワイの分は後で回収するからって

「一ノハナ」

九月二十一日

2秒と待たずは目の前を新を追いかける巨大な質量が通りすぎていく。

銀山妙高、56歳。柳都高校勤務歴14年のベテラン数学教師にして、生活指導の首領。^{（ドクター）}しかも私と新のクラスの担任。100キロを超える質量がありながら信じられないほどの機動性を誇り、虎を思わせる禿げ頭にビームでも出そうな眼球がとてつもない威圧感を放つ。要するに何があつても正面に立ちたくない、まして叱られるなんて絶対に考えたくない　そんな先生だった。

新
ありがとう。

何でかはよくわからないけど、私のためにわざわざ限をサボつ

てまでマックを買いに行つてくれたんだね。

しかもかつて誰もサボることができなかつた銀山の数学だつてのに。

腹ペコな私のために

本当にありがとう。新のこと、一生忘れない。

新の逃げた方向に軽く手を合わせると、今度はマックの袋に対してしつかりと手を合わせた。

「では、ありがたく頂きます」

教室に戻ると襲われるので、適当に探して見つけた人気のない階段に腰を下ろして袋を開けた。極上の油の香りに脳がくらくらする。マックシェイクにぶすっとストローを差し込み、すぞぞぞぞぞつと一息に吸い尽くしたころにはどつかの馬鹿のことは頭のどこにもなかつた。お腹が減つていたのもあって、次々にバーガーを取り出しては頬張り、取り出しては貪つた。

美味い。

やはりマックはいい。

ダイエットをしなきやいけない女子高生としては天敵だけど、でもふとした時に食べたくなる人工的な味。

クセになるジャンクフードな味わい。食品加工の闇、健康にちつとも良くないという事実が今かぶりついだビッグマックを一味もふた味もおいしくする。正直たまらない。

バーガーの合間にポテトをつまむ。熱々でパリッとしたポテト。油がにじんでパリパリ感がなくなると皿みが半減するから、早めに食べなくてはならない。ああ、マックフルーリーを溶かすなんて愚行も犯すわけには行かない。これは忙しい。

何か大事なことを忘れているような気がしたけど、嬉しい忙しさに頭を支配された私は食欲のままに喰い続けた。

「こんなところにおつたか。ただいま、今度ばかりは死ぬかと思うたで」

山のようにあつたポテトを平らげる。最後までパリパリ感が残つて良かつた。

「ありや、ワイの分はいつたい……つて？」

バーガーの最後の一 口をシェイクで流し込む。平行して食べていたマックフルーリーもあと少しだった。嗚呼名残惜しきこと限りなし。

「あれで2人分やつたのに……全部喰つたんやな、トキ」
本当に名残惜しい、これが最後の一 口……。

『おい、トキ』

地の底から噴き上がつたような声がした。エコーかかってる。

「！？」

がばつと顔を上げると、何時の間に戻ってきたのかニンマリと嫌らしい笑みを浮かべた新と目があつた。でも目は全然笑つてなくて、激しく氣味の悪い顔だった。

「ちょっと！ 何で生きてんの！？」

「勝手に殺すなや！ 銀山の奴を命からがらまいてたんや！ で、ワイの分は？」

.....。

沈黙。

気が付けばハンバーガーの袋もポテトの箱も全て空。シェイクも然り。片方のマックフルーリーもまた既に全滅。手にした最後のマックフルーリーには僅かにあと一口がプラスチックのスプーンに乗つている。

「はい、あーん」

「あーん んむ。うん、たまにはアイスもええな。で、ワイの分は？」

私の中で何かが激しく警鐘を鳴らしていた。努めて甘えた声を出してみる。

「ね、おいしかった?」

「で、ワイの分は?」

タイムコモジット。もひつ茶番に付き合つてくれそつもなかつた。

ヤバイ。

猛烈にヤバイ。

「ごめんなさい!」

新が呆れて大きく息を吐いた。

「ワイの言つたこと覚えてないんか?『ワイの分は後で回収するからどうぞおいてやー』」

「……あ

やういえばそんな」と言われたような気がする。

「「めん! お腹減つてて、お代なら払」

「もうええで、なくなつたもんはしゃあない。お代もいい。半分は食べせせるはずやつたしな。問題は時間や時間。鬼教師銀山の2限サボつてまでマックに特攻したワイの苦労を一体どうしてくれる。マックまでチャリでここから片道30分はかかるんやで」

「いや、本当にごめん。この通りです」即刻、土下座。

「これはどーしたもんやろなー」

「すみませんでした」床に頭をすりすり。

「ほんとーにどーしたもんやろなー」

新、すげい棒読み。この「どつかお慈悲をお代官様状態」、早く終わらないかな。

「新様ごめんなさい何でもします……ていうかそもそも私をマックで釣つて頼むことがあつたんじやないの!? 食べた以上付き合つわよ!」

「さすがトキさん! やうしなくつちや」

「どうせ私が今日日直で昼休みに泣く泣く売れ残りの購買パンを買うしかなくて、とてもなくお腹空かしてて持つてきたマック全部

食べちゃうことも計算済みなんでしょう…？」

「いや、そこまでは……まさか全部平らげられる」とまでは読めん
かつたわ。けつこうの臉いしんぼさんやったんやなトキは」

「悪かったわね

「別に悪いとは言つてないでー」

「……で、用は何なの?」

私は一息ついて態度を素に戻した。その様子を見て、新もまじめ
な表情になる。

「ちょおーっと付き合つてくれへんかな？ 放課後、水泳部まで」
新の入つてる水泳部に？

「よくわからないけど、わかつた。行くわ」

「助かるわ。あともう一つ頼みが

「何？」

「腹が減つて大変なんや。購買のパンはもうとっくに売り切れど
し。胃の中のマックを分けてくれへんか？ こう、鳥の親子みたい
な感じで」

蹴つた。

Scene・3 大型連休の翌日の話（後）

放課後になつて私はプールに行くことにした。

教務棟を抜け、体育館への連絡通路の途中の「プール」と書かれた無骨な鉄扉を開けると、日差しが全身を覆つた。

日本海側の白根県にはわりと珍しい、雲一つない快晴。

まだ春だというのに今日はやたらと暑かつた。じつとりと汗がわいてくる。こんな日に泳ぐ水泳部を少し羨ましく思いつつプールサイドに足を運んだ。

なぜか鬼教師の銀山が足を組んで瞑想していた。

「…？」

何かの仏像にそつくりだった。

一瞬にしてわいていた汗が引く。

戸惑いつつもとりあえずすべてを見なかつたことにして引き返した。

『待たれよ、汐見トキ』

…引き返せなかつた。

先生の厳かな一言は私の全身をフリーズさせた。

眼を閉じているのになんで私がわかつたのかはもうこの際どうでもいいや。

「あの、どうしてプールにいらっしゃるのですか銀山先生」首だけを何とか動かしてそれとなく尋ねてみる。

『私は今年から水泳部顧問だ』

「あ、そうだつたんですか」

内心は全然「そうだつたんですか」じゃ済まなかつた。こここの水泳部、よりによつて顧問は銀山ですか。私もう逃げていいくですか。しかしこんな顧問の下でよく新は耐えられたものだ。

「勝手に入つてすみません。私、新 小針君に放課後水泳部に来るように言われまして」

『知つてゐる。小針は今週、教務棟東階段の清掃担当のはずだ。もつともサボつていなければ話だが。小針が来るまで、ゆっくりとくつろがれよ』

プールサイドでくつろぐもなにもなかつたけど、ひとまず銀山から二メートル位離れたところに腰を下ろした。付かず離れずのギリギリなポジション。離れすぎると違和感を持たれるだらうし、だからとこつて近づくなんて怖すぎで出来ない。

『…………』

『…………』

お互いに沈黙。話すことがない。第一、銀山は瞑想中だった。

『…………』

『…………』

『……昼のマクドナルドは美味かつたか?』

「へ?」

唐突に変なことを訊かれた。しばらく固まつてから、返事を搾り出す。

「……大変おいしく頂きました。行動はアレでしたが、小針君には感謝しています」

『そつか』

静かで落ち着いた声音だった。

普段新に怒鳴り散らす銀山の印象とだいぶ違う、泰然とした雰囲気。これが銀山の素なのだろうか。

『そういえば、小針君の処置はどうなるんです?』

『誠に残念ながら、今回に関しては職員会議の結果不問といつ』
になつた』

やはり銀山は銀山だった。

途端、憤怒のオーラが立ち上る。思い出し怒りをしているらしい。

『あやつめ、成績トップを盾にとつて我以外の教師を誑かしあつて』

実は小針は1年生の頃から学年の成績で常に1位をキープしている秀才だつたりする。卒業生の殆どが大学進学し、旧帝大や早慶・東大にも現役合格が多いこの進学校の中では凄いことだと思う。少しぐらいなら大目に見てもらつてもいいだろう。生活指導の銀山としては気に喰わないだらうけど。

『小針新、覚えておれ……』

憤怒のオーラは銀山の周囲数メートルを焦土にしつつあった。とんでもなく熱い。

正直な話、一刻も早く逃げたい。
でも怖くて身体が動かない。

というか、そろそろ誰か来て欲しい。

いい加減隣の閻魔大王の沈黙の炎に焼かれそうだった。

その時、

ぱしゃり

どこからか清廉な水の音がした。ここからでは見えないが、誰かがシャワーを浴びているらしい。私の祈りが天に通じたのか、銀山は怒りのオーラを収めてくれた。助かった。

ぱしゃぱしゃと、水が石畳を叩く音が聞こえる。1滴1滴を聴くたびに、私の感覚が研ぎ澄まされていくような心地よさがあった。やがてシャワーの音が止んだ数瞬の後、彼女が姿を現した。

一瞬、空気が静まった。そんな気がした。

肩口まで伸びた金髪から水をしたたらせ、淀みのない足どりでホールに向かつて歩みを進める。途中でこちらに顔を向け、銀山に向かつて一礼。芯の通つた背筋と、洗練された身のこなし。おまけに

見惚れてしまいそうになるほどの中の美人だつた。

スタート台の前で立ち止まり、彼女は準備運動を始める。一部始終が舞踊の所作であるかのように、微塵の迷いも間断もない動作だ。髪を手早く纏め上げキャップを被り、「ゴーグルをピタリとつけた彼女はおろむろにスタート台に上った。

右足は前に、左足は後ろに。両の手はスタート台の前のへりを掴む。ちょうど陸上のクラウチングスタートのような姿勢だ。そのままで重心を限界まで後ろにかけ、全身の力を溜める。

やがて彼女が水の先を見据えた。来る、と思つた。

「フライ・イン。」

全身をバネにして、高く高く弧を描く。長い一瞬。水面に吸い込まれるように、ほぼ直角での着水。音が殆ど立たない。

彼女は長い潜水を経て、滑るような速さで水を搔き始めた。1つも無駄の無い動きで、水の先を田指している。

水の中で飛んでいるみたい。心からそう思つた。

「咲花の奴、もうやつとんのか」

気がつけばそばに新が来ていた。着替えを済ませており、競泳水着に身を包んでいる。

「すごいね、あの子」

「まあ咲花は水泳部の中でも別格やからな。そりだ、来てもうておおきに！」

「あ、うん」

「よし！ んじゅ早速で悪いんやけど、今からあの咲花と勝負してもらひで」

「はあ、勝負ねえ……」

え？

勝負？

空気が凍つた。間違いなく凍つた。

「シヨウカジハ、なに?」

「そんな自分はいかにも関係ありませんみたいな顔されても困るで。ええか、ここにトキを呼んだのは咲花と水泳で勝負させるためや。女子部員に水着とタオル用意してもらつたし。何や? 何か言いたいことでもあるんか?」

卷之三

16

10

「ちよつ♪」

ごん、と頭頂に痛みが走った。

九月九日憶山東

「いい加減現実逃避はやめや。来た以上は泳いでつて貰うでしょ！」

んて無茶苦茶な「

5'

「いや、でもさ……余りにも唐突つて書つか」

「あ、井つみ」

「……すいませんでした。やりますからその銀山みたいな形相やめ

てお願いだから

「わかればよろしい

そういうことになつた。

その日、5月6日。

1週間近い大型連休の翌日。

この日を境に私の平凡な学校生活は大きな変貌を遂げることになるとは、しかも喰い物の恨みからそうなるとは思いもよらなかつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2286d/>

ウルトラマリン！

2010年10月9日00時12分発行